



アクテノン

NO. 88

名古屋市演劇練習館機関紙

おかげさまで演劇練習館は20周年を迎えます!!

名古屋市演劇練習館アクテノンは、名古屋の演劇関係者の要望を受け、国内でも数少ない舞台芸術の練習専用施設として平成7年に開館し、今年の12月1日で開館から20周年を迎えます。これもひとえに、全国のアクテノンを愛する皆様の温かなご支援の賜物と深く感謝しております。

これからもより一層、演劇・舞踊・音楽などの舞台芸術をはじめ、その他様々なジャンルでご活躍されている皆様に、愛され親しまれる施設を目指してまいります。皆様のご利用を心よりお待ちしております。

名古屋市演劇練習館(アクテノン)



アクテノン バンザイ

20年前、“これで名古屋にも自慢出来る施設が出来た、何てったって演劇の稽古専門だからね!”と無性にうれしかった。いや、税金の使い道としては、一番後廻しにされそうな部分ですから尚更でした。

ひょんな事から、配水塔が変身しました。

当時の西尾名古屋市長さんとお正月対談で“文化小劇場も出来つつありますが、何か注文は?”と聞かれて、“稽古場がほしいですね”

と答えました。市長さんは小劇場の利用者の声を聞いたかっただけでしょうが、しかし、これは良い質問でした。細かなことは省きますが、その証拠に市長さんの応えが早かった。

ほぼ半年後、ドイツで水道塔をホテルにして盛業中のところが見つかった視察に、とかま、担当者は大忙しだったようです。確か三年後には愛称募集をしていたと思います。で、アクテノンと決まりました。

誕生のキッカケになった一人だからと、運営委員に指名され、あの素晴らしい外観を借用して夏の一夜野外劇など出来ないかといったのが、騒音にクレームがついたりしながら今もアクテノン・フェスティバルとして続

天野 鎮雄 (劇座代表、俳優)

いていると聞いてこれも感激です。(本当は、二年前のハリケーンで以来中止になってしまいましたが、毎夏、市民を無料招待するニューヨーク・セントラルパークの“シェークスピア・フェスティバル”を狙っていたのですが——)

僕も30年以上前に、全日制の演劇学校“劇塾”をはじめました。今も細々と続いています。

当時の中日新聞の“この人”欄で、恐れ多くも、“愛知県立芸術大学に演劇科が出来るまでのつなぎのつもりです。”と答えています。

始めて2年目でしたか、一人の少女の訪問を受けました。聞くと“兵庫県立宝塚北高等学校の演劇科を受けたいので、実技(詩の朗読)の指導をしてください。”というのです。兵庫県には、県立高校に演劇科がある!驚きでした。だってまだ今に日本の国公立大学には、演劇科も映画科もないのですから——。兵庫県には県立劇団もあるのです。(阪神淡路大震災では慰問で大活躍しました。)

アクテノンという演劇練習館がある、この名古屋。さて、次なる挑戦は——。演出者・演技者を育てる附属演劇研究所か、或いは、専属劇団“アクテノン”の旗揚げでしょうか。



いつまでもアクテノンをよろしくお願いします。

岡田 仁司 ((公財)名古屋市文化振興事業団 事業部長)

演劇練習館の開館準備担当を経て館長になったのは20年前、36歳の頃でした。多くの方のご意見をいただきたいという思いから、施設運営委員会を設置し、深夜まで貸し出しをするにはどういった方法があるのか、利用申込の際に演劇が優先されるため、演劇の定義をどうするのか、文化事業をどう展開するかなど、多くのことを

話し合いました。運営委員には天野鎮雄さん(演劇)、松岡伶子さん(バレエ)、関山三喜夫さん(現代舞踊)など、錚々たる皆さんにお力添えをいただきました。

「アクテノン・フェスティバル」は地域の方々にもご覧いただけるよう、野外のステージを会場に選びました。当初は予算もなく、運営委員の皆さ

んからカンパを募って開催しました。ところが、音量が大きすぎて、近隣から激しくクレームを受け、へこみました。職員からも「次年度は止めた方がいい」という意見が出ました。次年度の事業方針を職員会議で述べる時が来て、熟考の末、「お叱りを受けたからこそ、それを克服して、地域に愛される施設を目指し、フェスティバルを開催したい」と説明した時、職員は驚いたと随分たってから聞きました。クレームが大きかったため、やらないだろうと思っていたようです。

その後、フェスティバルは今日まで続いています。文化事業や施設の運営など、後を引き継いでくれた職員に恵まれ幸せです。職員の皆さんの情熱と努力に感謝を申し上げるとともに、演劇関係者始めご利用の皆さんに厚く御礼を申し上げます。



20年目のアクテノン

小熊 ヒデジ (俳優・プロデューサー)

演劇作品は、劇団やアーティストだけでなく、稽古場や劇場、観客や協力者などを含む様々な環境に支えられ、初めて生まれる。とりわけ稽古場の存在は、創作過程がそのまま発表につながる演劇にとって最も重要と言える。20年前、名古屋市演劇練習館アクテノンが開館した。演劇専用の練習施設だ。天野鎮雄さんと当時の市長さんとの対談がそのキッカケだと聞く。感謝の言葉しかない。その恩恵に与った

演劇人は数知れないはずだ。僕自身、年間かなりの日数をアクテノンに稽古で通う。稽古以外にも、東西からのアーティスト招聘、次代を担う人材発掘・育成のための演劇教室、演劇文化裾野拡大を目的とした様々なワーク

ショップ開催等々、アクテノンありきで始動させた事業が沢山ある。複数の練習室や、様々な作業が可能な研修室、充実した設備を備えるリハーサル室等を持つアクテノンは、この場所を訪れば全てのクリエイションを賄えるという魅力がある。演劇は誰にでも出来る、最もハードルが低い芸術であると同時に、とても過酷な側面も持つ。だからこそ常識を揺さぶり、予期しない価値観に出会うことが出来る。濃密な創作時間を提供し、利用者を理解した繊細な心遣いで創作過程と並走する心強いパートナーであるアクテノン。練習施設だからこそ、ここには毎日のように大勢のアーティストが集う。それは、この施設の大きな可能性だと思う。地域の文化拠点として確かな存在感を持つ名古屋市演劇練習館アクテノンは、演劇関係者だけでなく、多くの地元住民からも愛される、全国に誇るべき文化施設だ。

この度20周年を迎えるにあたり、演劇の稽古場としてご利用いただいている皆様に、代表してメッセージをいただきました!

「こんな場所、他には中々ないもんだ!」

さち (劇団いなほのかほり 代表)



願うは50年、70年、100年と。ずっと先の世代の演劇人にも愛される練習館として、そこに存在し続けてもらえる事。カーブのかかった稽古部屋。もちろん使いにくさは、ある。正直、真四角の部屋になってほしいと願った事さえある。けれど住めば都ならぬ、使えば都? どういう訳か、そこにさえも愛着が湧いてくるから不思議。受付に顔を出すと、いつも笑顔の職員さんがいて、私に癒しをくれる。昔の芝居仲間と思いだけが顔を合わせて、再び親交を深めたり。アクテノン名古屋を代表する稽古場であり、交流の場であり、そして癒しの場所でもある。今後も変わらずに『愛されるアクテノン』でいて下さい。20周年、おめでとうございます!

「アクテノンは特別か?」

刈馬 カオス (刈馬演劇設計社 代表)



他地域の演劇人との交流が多くなった。すると、「名古屋はどうなんですか?」と聞かれる。私はすかさず「公共の、演劇専用稽古場があるんです」と答える。相手は目を丸くして驚く。私は自慢気に、アクテノンの素晴らしさを語る。こんなやりとりを何回しただろう。だが、同時に寂しさを感じるのだ。このような施設に驚かれる現状に。できれば「そんな施設、こっちにもあるよ」「うちには2つある」「それでも足りないくらいでさ」と言われたい。いつまでもアクテノンが特別な存在であってはダメなのだ。そんなことを思いつつ、今日もアクテノンに向かう。新たな演劇作品を生み出すために。

「あら、ちょうどいいところに」

堀尾 宣彰 (劇団Hi-T Growth 代表)



「水曜日のお昼って空いてませんか?」始まりはそんな一言からでした。当時、うちの劇団は毎週水曜の夜に稽古をしていて、それを知っていたアクテノン職員の方にそう声をかけられたのです。「シニアの演劇講座の演出助手を探していて、堀尾さんがピッタリだと思って。」カラカラと明るく話すその姿からはNOと言わせない不思議な雰囲気があり、そこからあれよあれよと5年に渡って助手を務めることに。今ではすっかりシニア枠担当の人になりました。あの時、パッと僕らの間を繋いだ姿はまさに「仲人」のようでしたね。20周年を迎えるアクテノン様へ。ともしれば内にこもりがちな僕ら演劇人をつなぐ仲人として、これからも何卒よろしく願いいたします。

「アクテノン20周年記念スピーチ」

中尾 達也 (オイスターズ 代表)



まずは20周年おめでとうございます。こんなおめでたい回の機関紙にコメントを載せて頂けるという事なので今素っ裸で書いております。私はアクテノンがある中村区が地元なので、アクテノンがまだ図書館だった頃よく本を借りに来たり、プールに遊びに来たり、周りも田んぼばかりだったのでザリガニなんかを取りに来ていました。あの頃はまさかここが演劇練習場になることも、自分が芝居を始めて毎日のように通うことになるとは思ってもみなかったです。どのくらい思ってもみなかったかという、みなさんが想像しているその『倍』ぐらいだと思ってください。しかし建物自体アクテノンになってから20年、その前の図書館が20数年、さらにその前と考えると杭打ち作業が正常に行われていて本当に良かったと思います。そして最後にはなりませんが、日頃利用させてもらっている全ての劇団に代わりまして私の方から、館長さんやスタッフさんにお礼を言いたいところを『グッ』と堪えまして挨拶にかえさせていただきます。

「寄り添うアクテノン」

おぐりまさこ (空宙空地 代表)



まずは開館20周年、おめでとうございます。たくさんのクリエイターに愛されているアクテノン。「演劇練習館」という潔い名前、真っ白で円形の建物の存在感、初めてその前に立った時は圧倒されました。利用者の私たちをいつも笑顔で迎え、見守り、声をかけてくださる職員さんの姿に、稽古がきつい時も励まされ「もっといいものを創らない」と、奮い立たせてもらっています。いつも綺麗に掃除された部屋やトイレ、ロビー。何気なく利用しますが、その状態を保つのはきっと大変だと思います。いつも創作者に寄り添っていただく姿には感謝するばかりです。これからもどうか変わらず、私たちを支えてください!

「ありがとう守衛さん」

渡山 博崇 (劇作家・演出家・星の女子さん主宰)



アトリエ(稽古場)を持たない劇団にとって、こういう施設ほど重要なものはありません。私たちはどんな演劇をするにせよ、稽古をしなくては始まらないのですから。特にここが画期的なのは、深夜まで延長使用ができることです。うちの劇団はよく延長します。本番より稽古のが好きくらいです。そんな延長稽古で、いつもお世話になっているのが守衛さんです。当日に延長申請をするので、いつも急に遅くまでの残業が決まるのですから。アクテノンを利用し始めたのは、演劇を始めた15年前くらいからなのですが、記憶違いでなければずっと同じ顔の方が守衛を務めておられます。あまりに変わらないので、一族で、そういう一族で守護しているのかもしれない。これからも同じ顔でアクテノンを守っていただきたいです。



編集発行/平成27年11月25日(年4回)

財団法人 名古屋市文化振興事業団 [演劇練習館 [アクテノン]]

〒453-0841 名古屋市中村区稲葉地町1-4-7

TEL 052-413-6631 FAX 052-413-6632

※この印刷物は、古紙/パルプを含む再生紙を使用しています。

